

## 創刊期『家の光』における課題としての<農村>

著者	河内 聡子
雑誌名	日本文芸論叢
巻	21
ページ	34-47
発行年	2012-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/55039">http://hdl.handle.net/10097/55039</a>

# 創刊期『家の光』における課題としての〈農村〉

河内 聡子

はじめに

ここに一枚の絵がある。これは、『家の光』の創刊号の口絵に掲載された美人画で、作者の田中良は、当時、『主婦之友』などの雑誌挿絵や、歌舞伎の背景画などで活躍する日本画家であった。元々は表紙として依頼されたこの絵は、東京で人気を博していた田中に、編集者側が農村の美人画を依頼したことにより描かれた。

この絵について、創刊号の広告には「閑雅な農村を背景とした美



【図1】『家の光』創刊号口絵

しき婦人の  
三色版」と  
説明がなさ  
れているの  
だが、「春」  
と題された  
この絵の背  
景は、その  
筆に精緻さ  
はなく、「閑

雅」というよりは、むしろ荒涼とした印象をすら与える。遠くに見える家は屋根しか描かれず、植物の描写も曖昧であり、いわば具体性を誤魔化すような描きぶりである。この絵から受ける印象は、農村に対するイメージの希薄さであり、背景としての農村風景は曖昧なものと云わざるを得ない。女性の髪型も、当時の都市部を中心に流行していたいわゆる「耳隠し」のスタイルであり、「農村の美人」を指す記号性は乏しい。やはり東京を中心に活躍していた田中には農村を描くことは困難であり、それはかつて夏目漱石が「帝都を去る程遠からぬ田舎」でも「想像にさへ上りがたい」と述べたように、都市にあるものにとって農村とは容易にイメージし難いものであった。

そして、この曖昧な農村風景を背景とした絵を創刊号の口絵に置く雑誌『家の光』自体も、同様の困難さを課題として抱えることになる。農村向け大衆雑誌を標榜する『家の光』の発行元である産業組合中央会は、東京に所在しており、都市を起点としながら、農村の読者に対してどのような情報を発信していくのかが大きな

課題となった。

例えば、刊行前に各地で開催された会合において、この絵を表紙に掲げた創刊号の試作を見せたところ、地方の役員より「水谷八重子に似ている」と指摘を受け、「女優の似姿をかかげた雑誌は普及するわけにはいかない」と、表紙への採用を撤回させられた経緯がある。女優をモデルにした婦人画を表紙とする雑誌は、『主婦之友』や『婦人倶楽部』など、都市部を中心に広く流通していた婦人雑誌ではすでに当たり前のものであったが、かたや農村地域では非難の対象となったのである。この出来事の一つ取っても、『家の光』が創刊前から、都市と農村の間に横たわる文化的・社会的な認識の隔たりを、いかに克服すべきかという課題に直面していたことが窺われる。

本論では、『家の光』が刊行されることになった経緯と、創刊期における誌面の内容、その変遷を辿ること、発行された当初において、農村向け大衆雑誌としてどのような編集を行ったのかを考えていく。そして、農村地域に情報を発信するメディアとして、『家の光』編集部が、いかに「農村」というものを措定し、対象化しているとしたのか、その試みを明らかにしていきたいと思う。

## 一、『家の光』創刊の経緯

大正十四（一九二五）年に誕生した『家の光』は、もともととは母体である産業組合の一般大衆に対する宣伝・教育を目的として発行されることになった。当時の産業組合の状況は、組合数・組合員数ともに数字の上では順調な伸びを見せていたが、一方で地

域による展開の差や、事業の偏り、中産以下の組合員の少なさなどの課題を抱えていた。そのため、「産業組合をして、いつそその活動を促し、更に組合員を増加し、協同精神の高揚に努め」なければならぬとされ、既存の組合員への教育と、未加入者への宣伝の必要性が高まり、一般大衆に向けた情報発信の方法が模索されることとなったのである。そこで、見出された方策が、通俗雑誌の発刊であった。<sup>⑧</sup>

当時の産業組合では『産業組合中央会報』という名の月報式の機関誌が既に刊行されており、組合の理事や幹部を対象にごく少数だけ発行されていた。その内容は、主に会務報告や組合の活動事例、あるいは専門的な論文などで、組合活動の実践や理論に重点を置くものであったために、大衆向けの雑誌には適さないものであった。一般の組合員も親しめる雑誌の必要を感じた当時の中央会会頭・志村源太郎<sup>⑨</sup>は、まず機関誌を改善するため、その計画に沿う人事に動き、雑誌編集に経験のある者を中央会に招くことになった。

その際に呼ばれたのが、中央会の幹部であった千石興太郎<sup>⑩</sup>の大学の後輩である有元英夫であった。有元は、岡山県農会で雑誌『農家の友』を自ら計画・編集し、地方雑誌としては異例の部数を発行することに成功していた。その以前には、上海日々新聞社（東京支局）や、大連の遼東新報社で記者として活躍していたため、それらの豊富な経験を活かした編集が有元に期待されていたため、それら

有元はまず、機関誌の名称を『産業組合中央会報』から『産業組合』と短縮し、四六倍判を小型の菊判に変えるなど刷新を行っ

たが、思うような成果は得られなかった。有元は後に當時を振り返り、次のように述べている。

「産業組合」の通俗化、普及化を私が研究することになって、四、五ヶ月、いろいろやってみたんですが、一つの雑誌で役員と組合員の両方によませることはむずかしい。雑誌は二種類出して、一つは会報、月報式のもので指導者向きの協同組合運動の理論に重点をおいたもの、もう一つは、組合員を対象とする大衆雑誌を作る必要がある。

結局、機関誌とは別立ての雑誌が必要であると考えた有元は、その旨を千石に伝え、賛成を受けて大正十三年（一九二四）十月ころ、「家庭雑誌発行に関する計画案」<sup>⑤</sup>を作成した。計画案は志村会頭にも承認され、翌年の大正十四年一月から、事務所を東京市牛込区（現・新宿区）に在所する中央会内に置いて、創刊の準備に入ることになる。雑誌編集の主なメンバーは、有元を始め、読売新聞で農政記事を担当し、すでに農村文化協会発行の『農政研究』の編集も務めていた古瀬伝蔵などであり、「農村向け」を強く意識した布陣となっている。

創刊の準備が進められると同時に、機関誌『産業組合』誌上においても『家の光』に関する告知が載り、「家庭雑誌、婦人雑誌は随分沢山ある、地方にも可なり行つて居ますが、それは主として都会文化宣伝雑誌でありまして、真に農村生活を保護し振興せしむるには適しません。本会発刊の雑誌は決して都会文化中心の雑

誌ではありません。」と、農村生活に軸を置いた雑誌であることが強調されている。また、「創刊趣意書」<sup>⑥</sup>では、雑誌の特徴について「一般の組合員及其家庭の実生活を基礎とし、趣味と実益とに富んだもの」であり、「主人主婦はもちろんのこと、青年子女、老人子供にも安心して読ませる事が出来る」と説明している。ここで『家の光』が基礎とするという「一般の組合員及其家庭の実生活」とは、当時において産業組合の組織のほとんどが農村地域に集中することから、農村生活を指すことは言うまでもない。いわば、『家の光』は農村社会における老若男女の全てを読者として想定し、その生活に対応させた編集の方針を打ち出しているのである。創刊の前月には『産業組合』に大々的な広告が掲載され、「通俗家庭雑誌」を標榜する雑誌の紹介として、「本誌を読まない家庭は暗黒であります。本誌の購読に依つて暗黒の家庭は光明を得荒さんだ家庭は平和となり、始めて共存同栄の実を発揮することが出来ます」と、その実生活における有効性を説いている。

このように、「真に農村生活を保護し振興せしむる」ため、特に農村生活者に視点を置いた雑誌として発行された『家の光』ではあったが、一方で、発行者側の思惑も露骨に示されることになる。次の資料は、『家の光』が創刊された同月の『産業組合』誌上に掲載された、編集部から組合員に向けた通告である。

『家の光』は無論一般の家庭雑誌で、あらゆる階級の方々に読んで戴きたいのですが、併し実は、打開けて言へば産業組合の宣伝雑誌であります。つまり、あまり産業組合のことばか

り書いては、手前味噌になつて、好感を持つて読んで貰へない嫌いがあるから、普通の家庭雑誌として、種々の記事を入れ、そのうちに自然に産業組合主義を宣伝しやうといふ<sup>(1)</sup>。いはゞ、葉をオブラードに包んで読者に飲んで貰はうとする敵本主義の編集方針でありますから、その積りで読んで戴きたいのです。

ここから、『家の光』の発行は、実際には産業組合の宣伝が目的の前面にある「宣伝雑誌」であり、農村向けの「家庭雑誌」としての理想や理念は二の次であることがわかる。このような「敵本主義の編集方針」という姿勢で始まった『家の光』は、創刊期においてどのような誌面作りがなされ、また読者によってどのような反応を得ることになったのか。次節からは雑誌記事の内容をもとに、創刊期の『家の光』を具体的に見ていくことにしたいと思う。

## 二、創刊期における課題

大正十四年五月に創刊された『家の光』は、菊判に百頁余りの小冊子であり、二十銭と廉価であるとはいへ、同時代に発行されていた『キング』や『主婦之友』に比べて甚だ貧弱なものであった<sup>(2)</sup>。創刊号の発行部数は約二万五千部であったが、その数字は「少くも二万部以上の購読者を得度を以て各支会に於て極力御勧誘」すべきことの通達によって、辛くも実現されたものである。

前節に述べたように、『家の光』は、農村向けの通俗家庭雑誌として刊行されたが、その一方で、産業組合の思想を涵養するため

の宣伝・教育を、思惑として孕むものであった。このような編集方針の二重性と、農村向けの雑誌を東京から発信するという距離感<sup>(3)</sup>は、創刊期の誌面において歪な形で表出されていくことになる。創刊期の『家の光』は、「内容的にはいまだ方向の模索期」であり「しばらくは全体の体裁にも試行錯誤がくり返された」とされるが、その模索と試行錯誤の軌跡を辿ることは、取りも直さず、雑誌が突き当たった課題を照射し、農村向け通俗家庭雑誌としての性格を収斂させていく過程を明らかにするものである<sup>(4)</sup>。

結論から言えば、創刊期の『家の光』は課題だらけであった。まず、誤植や脱字、写真の入れ違いなど、雑誌の基本的な体裁に不備が散見され、読者からの指摘を受けることも多い。これに対して、編集部は「誤植とか体裁とかについては今後大いに気を付けたいと思ひます」や、「編集には常に細心の注意を払つて居ります<sup>(5)</sup>。今後には十分に注意いたします」<sup>(6)</sup>、「校正や其他の点に不備の多いことを陳<sup>アウ</sup>言<sup>イ</sup>いたします」など、反省の弁が目立っている。

また、内容面での問題も特筆される。それは、農村生活や農村読者と、記事内容との間に明らかに懸隔が見られる点である。

例えば、創刊号には「雅趣豊かな農家の設計」という農家の住宅改良に関する記事が掲載されているが、その内容は農村生活の実情に即したものとはいひ難い。この記事では、文化学院の建築技師である能勢久一郎が「私の考案になる農家の設計に就いて思ひついた事」として、二階建て住宅の設計図とともに、「距<sup>ストリ</sup>の手に広いテレスをつけ(…)炬をコークスで焚く暖炬<sup>ストーブ</sup>にすると体裁が良



【図2】住宅改良に関する記事  
「農家風の文化住宅」（一卷四号）

などの楽器を置き、窓際はソファ、アームチェアなどを置いて、その他蓄音器、花台などを配置します」と、農村に限らず高級品と言えるものが調度品として挙げられ、想定される読者層の生活とは懸隔の著しいものとなっている。（図2）

他に、料理記事でも同様の傾向が見られ、「季節の料理」（一卷六号）では「チキン・マシム・ミンズ」、「チスナットコールブデング」などの西洋料理の調理法が載り、その材料も、それぞれ「バター大匙半杯、コンスタージ又はメリケン粉大匙半杯」、「ゼラチン七枚、砂糖大匙三杯、蜂蜜又はフルーツシロップを適量」など、自給自足

いように考えられ「す」などと述べられている。当時の農村では二階建ての家は全体の一割程度であり、西洋風の改築の提案も含めて、一般的な農村生活者の水準とはかけ離れた内容となっている。同じく住宅改良を扱った記事「農家風の文化住宅」（一卷四号）でも、「居間は九畳大、壁際にはピアノ

を主とする農村生活者が常備しているとは考え難いものが並んでいる。また、当時において砂糖は階級によって購入量に大きな差があり、東京帝国大学農学部<sup>13</sup>の調査によれば、農村地域における砂糖の一人あたりの年間消費量はおよそ三〜五斤であり、国の平均値が二十一斤であるのに比して「驚くべき少額」であった。また、農林省の調査<sup>14</sup>によれば、東北の各県では砂糖を購入しない家も数軒確認されている。少なくとも農村地域で砂糖が貴重品であったことは間違いなく、その状況からすれば、「砂糖大匙三杯」を要する「チスナットコールブデング」は非常に贅沢なものと言わざるを得ない。

このような住宅改良や料理に関する記事は、当時、都市部を中心に盛り上がりを見せていた生活改善運動<sup>15</sup>の流れを受けたものと思われる。しかし、生活改善運動はその活動の問題点として「主たる対象が都市中間層におかれており」、「農村に対しての生活改善としては欠陥をもっていた」との指摘もなされている。

同時代の雑誌『主婦之友』や『婦人之友』にも生活改善運動に則った趣旨・内容の記事が掲載されており、その内容は一見して『家の光』との類似性が認められる。編集部長の有元は、雑誌編集の方針の一つとして「よいものは惜しみなく真似せよ」という姿勢を持っており、古瀬伝蔵に「神保町へ行って主婦之友を一年分買ってきて、家庭記事と婦人記事を考えてほしい」と指示したとされるが、その影響は誌面に如実に表れていると言ってよい。有元の友人である宮部一郎も「家の光の編集方針に対しては、この道の先輩『主婦の友』の石川武美氏の助言に耳を傾けるところが多かった」と

述べており、特に『主婦之友』からの影響が強かったことは間違いない。また、『家の光』の広告には、標語として「わかりやすく為になる雑誌／安くて面白い雑誌」と掲げられているが、これは当時、最も人気のあった大衆雑誌『キング』の宣伝文句である「面白くて為になる」に倣ったものと思われよう。これらのことから、創刊当初の『家の光』は、他雑誌のスタイルを模倣することによって、誌面を成り立たせようとしていたと考えられる。

創刊当初の『家の光』は、農村向けと言いながら、あくまで机上の論理で編集を行っていたために、一般的な農村生活者の実情とは明らかに遊離した記事を掲載しており、読者からも「実生活を中心としたもので、読んだ事が直ぐ役立つやうにして下さい」との声が寄せられるようになる。結果として、読者からの支持を十分に得られないまま、徐々に発行部数を減らしていき、発刊二年目の二巻一号では、創刊号の二万五千部に比べて半分以下の一万一千部となってしまう。

創刊から間もない頃の『家の光』は、いわば都市で流通している理論を、言葉の上で農村に置き換えた記事を載せており、そこに実体的な農村のイメージは存在していなかったのである。前述のように『家の光』は東京という都市の位置から、農村へ情報を発信するという図式を持っており、その距離感をどのように克服し、農村生活に対応した記事を実現していくかが大きな課題となった。すなわち、農村向け大衆雑誌としての誌面を成り立たせる上で、『家の光』なりに「農村」というものを指定してみることが、肝要となつたのである。

### 三、誌面改良の方策

それでは、『家の光』はどのようにして「農村」を捉えようとしたのか。本節では、その試みを誌面の上から追って行きたいと思う。

まず、編集部は、地方に在住する組合役員などへの投稿を促し、機関誌「産業組合」において「地方的趣味あり面白く、或は有益な事柄について通信を願ひたい」と呼びかけを行っている。また、この時期に目立っているのが、読者に対する意見や原稿の募集広告である。創刊から僅か三冊目となる一巻三号には、以下のような原稿募集の告知が載っている。

#### 〈原稿募集題〉

題 如何に雑誌を改善すべきか

本誌は及ぶだけ広く読まれるやふに努力したいと思ひます。尤もたゞ広く読まれるだけでは何にもなりません、それと同時に出来るだけ家庭を益し、家庭を愉快ならしめるための読物でなくてはなりません。それには如何なる説物を掲載したら好いか如何なる様式に雑誌を改善して行つたら好いか、忌憚なく説明して頂きたい。

ここには、当時の『家の光』が陥っていた雑誌としての方向性の迷いが、明瞭に表れている。編集部では、載せるべき「説物」だけでなく、「様式」をも改善する必要に迫られていたのであり、雑

誌のあり方そのものが、根底から問われている状況であったことが窺われる。

このような誌面改良に関する意見や原稿の募集記事は、創刊期には多く散見され、特に、発行部数が著しい下降線を辿っていた大正十四年十二月の一卷八号では、一冊中に四箇所も掲載されている。そこには、『家の光』が今後どんな方面に進んで行つたらよいかといふことは編集者として常に頭を悩ましてゐる問題であります(…)これまでのうちで、どれが一番面白くて良い読物でしたか」と記され、編集部が陥つた雑誌の方向性の迷いが吐露されている。また、募集記事は徐々に懸賞金の付くことが強調された内容となつてきており、編集部の切迫した状況が仄見える。実際に、当時『家の光』は廃刊寸前に迫り込まれており、改めて編集の方針を定めていくことが喫緊の課題となつていた。その解決策として示されたのが、募集記事に象徴される「読者本位」という態度であつた。編集部は、読者の声に耳を傾けることで、対象となる〈農村〉のイメージを捉え返し、農村向け大衆雑誌としての新たな方向性を見出そうと企図したのである。

これに呼応して、読者から多くの要望や意見が寄せられ、一部は読者投稿欄において発表されるようになる。その内容は、『漢文漢詩杯も少々つ講義の記事及祝辞答辞之文章等』や、『新しい學術方面の記事』の掲載を要望する声など、多岐にわたっているが、その中でも比較的多く寄せられているのが、次に挙げるような読者欄の拡張に関する件である。

読者文芸がもつと種類を植やして頂きたい。仮令ば従来の外に都々逸とか小品文一口嚙冠付物は付謎々等、も少し拡張して欲しい。今の処では八十頁もある中読者文芸が僅々四頁しか無いのでは心細い感じがします。

右の記事を一例として、同様の意見が多く寄せられている。この意見に対応する形で、同号の巻末には「本号から和歌を二頁に、俳句、川柳を各一頁づつと致しました。その為、愛読者各位の玉稿を幾分なりとも掲載する事が出来る様になりました。皆さん奮つて応募して下さい」と、実際に読者文芸欄を拡張したことが報告されている。このように、編集部では読者の声を誌面作りへと反映させるという態度を鮮明にしていくようになる。

読者各位から、いろ／＼熱烈な叫びを聞くことの出来るやうになつたことを非常に心強く且つ嬉れしく感じます。それで成るべく多く皆さんの御注文に応じ御期待に添うやうにづつとめて居りますが、何分何万と云ふ多数の人達に一々御満足を与へる事の出来ないのを遺憾に思つて居ります。然しこの「家の光」を改善するために御遠慮なくドシ／＼御投稿下さいそして与論の大勢によつてだん／＼改善して行きたいと思ひます。

ここからは、読者の意見や要望に対して、出来る限り応えていくという編集者側の意志が見られるが、実際に創刊期の『家の光』の誌面の変遷を辿ると、読者に迎合しているとも取れるほど、



歩み寄った姿勢を示していると言える。無論、投稿の選別および掲載は編集者の裁量によるものであることにある程度の留意は必要だが、創刊期の誌面改良の動きが、多く読者の声を参考としていたことは間違いない。

例えば、「業務上当然起る疑問を解決する為め、質疑欄を設け」て欲しい旨の投稿の翌月に、読者の質問に答える形式の「法律相談所」「健康相談所」(三巻一号)が増設されている。また、「第三巻二月号に身の上判断観相のお話が記載してありましたが私は大いにこの易学的方面のことは記載せぬ方が良いと思ひます」と寄せられた批判に対して、記者より「貴方のお意はとくと承知致しました」との言葉を添えた上で、以後は観相関係の記事を取り上げなくなっている。

また、投稿された意見・要望を直接的に誌面へと反映させるだけではなく、読者の声を通じて編集部が捉えた「農村」の生活に対応した誌面作りにも努めるようになる。前述のように、創刊当初の料理記事は西洋料理を扱うなど、農村生活に即したとはいえない内容であったが、二年目以降は「蔬菜を主とした農村料理」(二巻一号)や「農村本位の簡易料理」(二巻二号)といった、農村が主体であることを謳ったレシピが掲載されるようになる。記事を担当する加藤キイは「豊島農業学校教諭」の肩書きを持っており、連載の初回ではわざわざ「加藤先生は、簡易料理に就ては特別な御研究をなされてゐます」との紹介文が添えられている。創刊当初は「読者からの原稿が集まりませんので、勢ひ中央に於ける名士の原稿が多く」<sup>①</sup>なるという状況であったが、誌面の刷新を図っ

ていくために、中央の名士ではなく、農村に縁のある識者に記事を依頼していくことにしたのである。これもまた、「読者本位」の編集と言つてよいだろう。<sup>②</sup>

このような編集方針について、有元は「大衆雑誌の編集にいちばん必要なのは、読む相手の境遇、趣味、知識程度を十分に心得ておくこと」<sup>③</sup>であるとした上で、『キング』の編集者から聞いたという言葉を引用しながら、「大衆は牛のようなものだ。馬は前から引っ張ればついて来るが、牛は後から追わねば進まない」と、大衆を読者として想定するためには、雑誌が先導するのではなく、むしろ読者の足並みに添いつつ、後押ししていく姿勢こそが重要であることを述べている。まずは読者の声に耳を傾け、その意見に寄り添うこと、それが創刊当初の『家の光』が突き当たった課題に対する一つの回答であり、「農村」を捉えていくために取られた具体的な方策であったのである。

### おわりに

本論では、『家の光』が創刊期において、どのように「農村」を指定したのかについて、その過程を明らかにしてきた。しかし、この過程を経て見出された「農村」とは、具体的にどのようなものであったのかという内実をも明らかにしていく必要があるだろう。今後の課題としたいところである。

『家の光』の創刊期は、農村に向けて情報を発信していくために、編集部が読者の声に寄り添うことで、「農村」とは何かを模索し、誌面を改め、「農村向け通俗家庭雑誌」としての方向性を見定

める時期であつた。創刊期において培われた「読者本位」の編集方針は、有元に引き継いで昭和四（一九二九）年より編集長となつた梅山一郎により踏襲され、徐々にではあるが普及拡大の成果として実を結ぶようになり、後の一五〇万部という大部数に繋がっていくこととなる。<sup>③</sup>『家の光』が、創刊期における経験を土台としながら、農村地域に多数の読者を有する雑誌へと成長を遂げていったことは間違いない。

『家の光』が創刊期に見せた、都市と農村との間に横たわる懸隔は、決して『家の光』に限った話ではなく、同時代に共通する問題であつただろう。本論で述べたような『家の光』の誌面改良を巡る試行錯誤は、都市から農村へという、近くて遠い距離への本格的な接近を試みた一つの事例として意味づけることも可能である。大正末期は、小作争議の活発化や農民組合の展開<sup>④</sup>によって農村に対する社会的・政治的な関心が高まり、また文学的な方面でも農民文学の隆盛<sup>⑤</sup>など、様々な意味で農村へと衆目が向けられ始めた時期でもあつた。そのような歴史の流れの中で、『家の光』という雑誌を位置づけていく必要もあると考えられるが、それはまた稿を改めて論じたいと思う。

## 注

- (1) 『家の光』創刊号目次（『産業組合』大正十四年四月号）
- (2) この絵の髪型が「耳隠し」スタイルであることについては、安達生恒が『家の光』の歴史——ある農本主義とその媒体——（『思想の科学』18号、一九六〇）の注において、先

んじて指摘している。「耳隠し」は、大正八年頃に登場したスタイルとされ、特に大正時代末から昭和前期にかけて、都市部の女性を中心に大流行したスタイルであつた。（参考『モダン化粧史——粧いの80年——』ポラ文化研究所、一九八六）

- (3) 夏目漱石『土』に就て（明治四十五年）（『漱石全集』第十六巻、岩波書店、一九九五）

- (4) 『家の光の二十五年』（家の光協会、一九四九）

- (5) 本論において『家の光』の「創刊期」としているのは、概ね、初代編集長である有元英夫（注11参照）が編集を務めた大正十四年（一九二五）～昭和三年（一九二八）の期間を指す。

- (6) 「農村」という語について確認しておきたい。当時において一般的に流通していた「農村」の意味については、柳田国男が『家の光』の創刊の翌年、大正十五年に発表した『日本農民史』に記された内容が、一つの範になるものと思われる。

農村と云ふ語は古くは用ゐられなかつた。近年農事の改良が一段と根本に及ぶ必要があることを感ずるやうになつて、始めて農村の改良を説くに至つたのである。従つて其語の範圍も、まだ精確にはきまつて居らぬ。此節の政治家などが農村振興策とか農村問題とか謂ふ場合の農村は、單純にキナカを意味するのみである。キナカはもととキ即ち民居の中と云ふことで、田圃又は耕地のことであつたけれども、既に久しい間、都

鄙の鄙即ち都に非ざる地方の全部をさしてさう呼んで居た。(…)村にして農を主とせざるものには、林業の村も鉱業の村も有得るが、それは僅かな例外であつて、漁業のみで成り立つ村、海女の部落などのやうに、一家残らずが海で働く村は少しある。併しそんな村にも土地のある限りは猶若干の農業があり、一方には市にも広い農用土地があるとすれば、農村と云ふ語は結局此等の全体を包容すべき、至つて漠然たる語になつてしまふのである。

以上のような「地方の全部をさして」呼ばれた「漠然たる語」としての「農村」に対して、特に『家の光』が、独自の捉え方で抽象化し、対象化していった農村について、本論において「農村」と表記することとする。

(7) 志村源太郎「産業組合の使命」(『産業組合』大正十四年九月号)

(8) 以上の経緯については、拙稿「制度とメディア——雑誌『家の光』の創刊の経緯に見る——」(『日本文芸論叢』第二十号、二〇一・一・三)を参照されたい。

(9) 志村源太郎(一八六七—一九三〇)は、山梨県南都留郡西桂村に生まれ、明治二十二年(一八八九)に東京帝国大学法科を首席で卒業した後、農商務省に入省。農商務大臣・後藤象二郎の秘書官となり、その知遇を得て、岩崎弥太郎の姪である直子と結婚した。農商務省工務局長、日本勧業銀行総裁などを歴任後、明治四十二年(一九〇九)に産業組合

中央会監事に着任し、副会頭を経て大正十一年(一九二二)に会頭に就任した。

(10) 千石興太郎(一八七四—一九五〇)は、東京府に生まれる。明治二十八年に札幌農学校農学科を卒業、同二十九年に農商務省農事試験場技師補佐となり、その役職で熊本・愛媛などに転動する。後に、農学校教諭、島根県農会技師兼幹事長を務め、明治三十九年に産業組合中央会島根支会理事に就任した。それからは長い間、産業組合運動の第一線で働き、中央会に留まらず組織のほとんど(信用部門以外)の最高責任者として活躍した。中央会の会頭にも二度なつており、第七代会頭を昭和十四年(一九三九)一月～五月、第九代会頭を昭和十六年(一九四一)四月～昭和二十年(一九四五)まで務めた。昭和十三年(一九三八)には貴族院議員に勅選され、翌年には国民精神総動員中央連盟理事、昭和十六年には大政翼賛会総務などを務め、体制への関わりを強めていった。また、終戦直後に組閣された東久邇宮稔彦内閣においては、農林大臣を短期つとめている。

(11) 有元英夫(一八八七—一九五九)は、岡山県に生まれ、明治四十(一九〇七)年に札幌農学校子科、明治四十五(一九一二)年に東北帝国大学農科大学農学科(現在の北海道大学)を卒業した。当時、産業組合中央会の主事であつた千石興太郎は、札幌農学校時代の先輩にあたる。産業組合に招来される直前には、大原孫三郎の経営する大原農業研究所に所属し、小作問題や農民史を研究しており、『中央

公論」への寄稿や、各地での講演活動を行っていた。創刊から昭和三年にかけて『家の光』の編集責任者を担い、その後も「家の光部長」として、雑誌の普及に向けた動きにおいて重要な役割を果たした。

- (12) 有元が岡山農会で発行していた『農家の友』の発行部数は、『家の光』の年史『家の光の四十年』、『家の光五十年の人と動き』によると五万部とされるが、有元はその数字について、著作集『俗名さん』の中で「実は、サバを読んでいるのです」と述べているため、正確な部数は不明。ただ、「農村で割合に評判がよく、読者が次第に増し、一冊の定価はわずかに五銭であったが、ようやく収支つぐなうようになった」（『俗名さん』有元英夫遺稿刊行会、一九六〇）とも述べており、相当の発行数ではあったものと考えられる。

- (13) 以上の有元の経歴は、有元の著作集『俗名さん』（有元英夫遺稿刊行会、一九六〇）の巻末に付された年表による。

- (14) 『家の光の二十五年』（家の光協会、一九四九）

- (15) 有元の著書『俗名さん』（前出）によると、「家庭雑誌発行に関する計画案」の書類は、「家の光」としては歴史的に見て非常に貴重な資料である」としてしばらく保管されていたが、昭和十年に事務所を丸の内に移転した際に、「うっかり古い書類と一しょに全部廃棄処分にした」という。そのため、その内容は有元の記憶に頼ることになるが、大体の内容は次のようなものであったと述懐されている。

産業組合中央会は、全国産業組合員の教育のために農

業知識を加味した通俗的の家庭雑誌を発行して、これを有料（一冊二十銭）で組合員に配給する。最初創刊号を二万部印刷し、漸次普及部数を増して十年間に十万部に達せしめる。発行事業は、特別会計として独立計算とする。ただし、はじめ数年間は、人件費その他の経費の一部は本会計から補給する。収支が償うようになれば独立計算として自給自足する。そして毎年の収支計算表を作成し、事業執行の順序は、翌年の大正十四年一月から準備に着手し、二月の全国の支会主事協議会に提案して、創刊号二万部を道府県に割り当て、予約購読者の申込を集める。新年度の四月から事業に着手し、五月に創刊第一号を発行する

- (16) 以上、『家の光』の創刊の沿革は、『家の光の二十五年』（家の光協会、一九四九）、『家の光の四十年』（同前、一九六八）、『家の光五十年の人と動き』（同前、一九七六）を参考とした。

- (17) 「家庭雑誌発刊計画」（産業組合）大正十四年一月号

- (18) 「通俗家庭雑誌『家の光』発刊の件」（産業組合）大正十四年三月号

- (19) 「広告」（産業組合）大正十四年四月号

- (20) 「家の光」創刊について」（産業組合）大正十四年五月号

- (21) 当時の『主婦の友』、『キング』など人気の大衆雑誌は、価格は四十〜五十銭と『家の光』より高めであったが、総頁数が三、四百頁くらいと厚く、更に付録が付いてくるのが慣

例であった。

- (22) 『通俗家庭雑誌「光の家」購読者勧誘に関する件』(『産業組合』大正十四年三月号)

- (23) 板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活——雑誌『家の光』にみる——』(三嶺書房、一九九二)

- (24) 『家の光』創刊期の誌面内容については、板垣邦子『昭和戦前・戦中期の農村生活——雑誌『家の光』にみる——』(三嶺書房、一九九二)、木村寿子・吉澤千夏『昭和前期に於ける雑誌『家の光』の誌面変遷——「ためになる」の追求と変質——』(足利短期大学研究紀要、24号、二〇〇四、三)でも触れられている。板垣は、記事タイトルから内容に一貫性を欠くことを指摘し、木村・吉澤は、創刊から昭和二十年までの期間を通じた誌面変遷を時系列的に論じる中で、創刊期を「農村読者の求める『ためになる』内容を記事として誌面に載せるべく、誌面改革が模索された」時期であると位置づけている。両論とも肯首に値する指摘ではあるが、誌面内容の具体的な分析、またどのような編集を行ったかという点については十分に論じられていない。

- (25) 『家の光』創刊について(『産業組合』大正十四年五月号)

- (26) 『編集だより』(『家の光』大正十四年八月・一卷四号)

- (27) 『読者談話室』(『家の光』大正十四年十二月・一卷八号)

- (28) 当時の住宅事情について、昭和前期に行われた農村調査の内容を参考にする。東京帝国大学が、昭和四年から六年の間に、山形、新潟の農家について調査した内容をまとめ

- た『農村生活の調査』(東京帝国大学農学部農政学研究室、一九三三)によると、全五〇一戸の内、二階建ての家は五九戸であった。また、農林省経済厚生部が昭和十年に、全国十二県三十六部落の農家を調査した『農村部落生活調査』によると、全一〇五一戸の内、二階建ては一〇五戸であった。
- (29) 『農村生活の調査』(東京帝国大学農学部農政学研究所、一九三三)による。

- (30) 同前

- (31) 『農村部落生活調査(概要編)』(農林省経済厚生部、一九三八)による。

- (32) 生活改善運動は、大正期から昭和前期にかけて、都市部の中流家庭を中心に行われた社会的な活動である。第一次世界大戦後の生活安定を図る内務省の思想善導政策である民力涵養運動の一環として始まり、後に文部省や農商務省といった行政主導によって着手されたもので、生活改善同盟会を中心に活動が進められた。その眼目は主に「一つには第一次世界大戦による日本経済の好況によって、奢侈に流れる傾向をみたことへの批判、二は我国の国際的地位の向上によって名実相伴う大国民たることへの要請に基づいて、国民の生活改善が急務であること、第三にはその実践の役割は家政担当者である婦人に負う所が大であること」(中島邦「大正期における『生活改善運動』」『日本女性史論集(6)女性の手らしと労働』一九九九)であった。

- (33) 中島邦「大正期における『生活改善運動』」『日本女性史論

## 集(6) 女性の暮らしと労働 一九九九

- (34) 一例を挙げると、『婦人之友』では「僅か十一畳の藁葺きの家を近代的に利用したミス・マクギルの簡素な住居」(大正十三年十二月)、『農家をそのまま利用した洋風の文化住宅』(大正十四年一月)、『簡単な仏蘭西料理三種』(大正十四年三月)など、『主婦之友』では「二千円で出来た便利な日本住宅」(大正十四年九月)、『美味しいソースの作方五種』(大正十五年五月)など。
- (35) 『家の光の二十五年』(家の光協会、一九四九)
- (36) 同前
- (37) 宮部一郎「有元さんのこと」(『俗名さん』有元英夫遺稿刊行会、一九六〇)
- (38) 『読者談話室』『家の光』大正十四年六月・一卷二号
- (39) 『家の光』につき全国組合に望む』(『産業組合』大正十四年十月号)
- (40) 『読者へ御願ひ』(『家の光』大正十四年十二月・一卷八号)
- (41) 『家の光の二十五年』、『家の光の四十年』、『家の光五十年の人と動きと』による。
- (42) 『読者談話室』岩手・一読者(『家の光』大正十四年十月・一卷六号)
- (43) 『読者談話室』島根県・柳井養親(『家の光』大正十五年十一月・二巻十一号)
- (44) 『読者談話室』長野県・甘露寺(『家の光』大正十五年四月・二巻四号)
- (45) 読者文芸欄の拡張についての要望は、例えば「読者の娯楽にして冠句、語呂合、尚読者欄を設けることは願ひたいものであります」(『読者談話室』北海道の一読者「感謝と希望」一卷三号)や、「俚語部新設していただきませんか。御願ひいたします」(『読者談話室』鳥取県山本迎夢「読者文芸を」二巻四号)、「自由論壇を設けるか若しくは談話室の頁を増大する事」(『読者談話室』長野県・春日薫・二巻十一号)など。
- (46) 『編集室より』(『家の光』大正十五年十二月・二巻十二号)
- (47) 『読者談話室』佐賀県・風野徳一(『家の光』大正十五年十二月・二巻十二号)
- (48) 『法律相談室』については、創刊号から一卷七号まで「法律問答」という質疑応答形式の連載がなされていたが一旦は打ち切れ、三巻一号で名前を改めて復活した。
- (49) 『読者談話室』島根・永井信義「編集室へ」(『家の光』昭和二年五月・三巻五号)
- (50) 『簡易な客膳料理』(『家の光』大正十四年十二月・一卷八号)
- (51) 『編集だより』(『家の光』大正十四年八月・一卷四号)
- (52) 有元英夫『俗名さん』(有元英夫遺稿刊行会、一九六〇)
- (53) 本論で明らかにしてきた創刊期の編集スタイルは、重ねて述べるように『家の光』が「農村向け」としての誌面を実現させていく方策であったが、一方で、別の意図もあったのだろう。それは、編集部と読者との相互の関係性の中で誌面を改良するというやり取りを通して、『家の光』が、読者

の要望に応える柔軟性と、読者に歩み寄る親和性を備えた雑誌であるということを、読者側に印象づける意図であったと思われる。創刊期の編集においてこのような思惑が存在していた可能性も、雑誌『家の光』の性格を考える上で看過できない点であることを付言しておく。

(54) 梅山一郎の編集の概要については、拙稿『家の光』の誌面改良——梅山一郎の編集態度を中心に——（『リテラシー史研究』第四号、二〇二一、一）を参照されたい。

(55) 小作争議は、大正七（一九一八）年のシベリア出兵を見越した米の買い占めや投機によって、米価が四倍に跳ね上がったことに対し、富山県魚津を皮切りに各地で起こった抗議運動に端を発するものである。この流れと、地方労働者の待遇改善運動が連動し、小作料の引き下げなど生活難の打開を求める農民を含めた地方労働者の全体的な運動へと拡大していき、大正後期から昭和初期にかけて全国で展開された。（以上は、林宥一『日本農民運動史論』（日本経済評論社、二〇〇〇）を参考とした。）

(56) 農民組合は、明治期に、小作人による地主の運動の中で各地に生じた自主的な組合が原初的な形態であるが、大正期の小作争議（注55）の高まりが全国的な組織を形成する契機となり、大正十一（一九二一）年四月に日本農民組合が結成された。これにより、農村における小作争議などの運動は、より規模を拡大し、活発化していくこととなり、結合と決裂を繰り返しながらも昭和十年代まで続く一大組織

が成立することになった。（以上は、農民組合史刊行会編『農民組合運動史』（日本民政調査会、一九六四）を参考とした。）  
(57) 農民主学は、明治三十年代以降より「郷土芸術」、「田園文学」、「農民小説」などの用語で原型として存在していたが、それは中央文壇における自然主義的な潮流の中で生じた単発のものであり、本格的な展開を見せるのは、プロレタリア文学や民衆芸術論の盛り上がりという流れを受けた、大正後期になってからのことである。大田卯によると「農民主学として、ある一定の内容、主張を持ち、目標（目的意識）をもって広く世間に呼びかけてきたジャンルが、初めてわれわれの前に姿を現したのは（…）実に、大正十二年三月のことであり、そして、直接的にその動機となったものは、その前年（大正十一年）十二月二日、東京神田の明治会館で行われた『シャル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会』であった」（大田卯『日本農民主学史』農山漁村文化協会、一九五八）。大正末から昭和初年にかけては、農民主学の勃興期と言える展開を見せており、数々の作家・作品を生み出していた。農民主学の盛り上がりとの時期と、『家の光』の創刊期は、ほぼ重なっていると言いうことが出来る。

\*本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（東北大学大学院文学研究科後期課程在籍）